

心の架け橋

遺愛女子高等学校 一年 櫻田 みゆ

今日も、朝から時間に追われるように過ごしていた。学校の授業、部活、そして塾。一日が終わる頃には、心身ともにすっかり重くなっていた。疲れきって下を向いて歩く帰り道、足取りはゆっくりで、肩に背負ったリュックがずっしりとのしかかる。その重さは、高校生になり初めて経験した今までに感じたことのない疲れ、家族と離れて寮で暮らす寂しさ、やりたいことができない焦りまで、私の心を映しているようだった。

街灯に照らされた寮までの道のりをゆっくりと歩きながら、周りの景色をぼんやり眺める。建物の影、風に揺れる木々の葉。人の気配は全くない。それらはすべて現実の世界だけれど、どこか遠く、心は少しだけ浮遊しているようだった。寮の建物が見えてくると、ほっとする気持ちと、少しの寂しさが同時に胸に広がった。ここは今の私の暮らしの拠点だけれど、「帰る場所」と呼ぶには、どこかよそよそしい。家族の会話も笑顔も感じられないこの空間は、どこか落ち着かず、時々心細くなる。

寮に着く直前、ふと視線を上へ向けた。何かに引き寄せられるように顔を上げると、夜空の中にひときわ輝く満月があった。空の雲や星の光さえかき消すほど、強く、大きく光っていた。夜の静けさに、月の光だけがはっきりと存在しているようだった。

私は思わず立ち止まった。普段の帰り道ではよく星を眺めていたのに、この夜は満月の誰よりも輝く姿に、心を奪われていたのだろう。背負っていたリュックの重みも、歩く速さも忘れ、ただ空を見上げる。風が肌に触れる感触も、足元の感覚も、すべて月の光に包まれて解けていくように思えた。そのとき、不意に心の奥で扉が開く音がした。溢れ出したのは、家にいた頃の記憶。食卓を囲む家族との会話、悩みを聞いてくれる家族、私の心を癒してくれる家族。一緒に家の外で眺めた満月の下で、何でもない話をしていた時間。あの頃当たり前だと思っていた風景が、今はこんなにも遠く感じられた。

「同じ月だ」

心の中でそう呟いた瞬間、目頭が熱くなった。家の外で家族と見た満月と、今寮の前で見ている満月は、確かに同じひとつの月だった。距離や環境が違っていても、私た

ちは変わらず繋がっている。気づけば、頬に涙が伝っていた。高校生になってからは泣かないと心に決めていたのに、次々と涙が溢れる。日々の疲れや焦り、ホームシック、言葉にできなかった寂しさが、月の光に解けるように流れ出していった。しばらくその場に立ち尽くし、ただ満月を見ていた。時間の感覚や焦りも忘れ、ただその瞬間に浸っていた。月の光は私を見守り、慰めてくれているように思えた。心の奥が少しずつ柔らかくほどこけていくようで、寂しさが優しく包まれていく。

やがて寮の中へ戻ると、またいつもの生活が待っていた。勉強、課題、そして忙しい日々。それでも、その夜の私は少しだけ心が軽かった。家族とは月を通して繋がっている。そう思うと、心強く感じられた。

あれから、私は心が壊れそうな時、夜空を見上げるようになった。満月でなく、欠けている月でもいい。細い三日月も、離れた所に暮らす家族と同じ空の下で繋がっていることを思い出させてくれるからだ。月の光を見つめることで、家族の温もりと自分の存在を再確認できる。寮での生活は、まだ時々寂しい。家に帰れない日が続くと、胸がきゅっと締め付けられることもある。けれど、今は近くで支えてくれる寮母さんや友達、先輩がいる。もし寂しくなっても大丈夫。その度に思い出せば良い。あの夜、満月が教えてくれた光と温もりを。

あの夜の月は、私にとって単なる天体ではなかった。家族と私を結ぶ架け橋であり、孤独を包み込む静かな友であり、心の中にほのかな明かりを灯してくれる存在だった。これからも、私は夜空に輝く月を見上げ続けるだろう。疲れた日も、幸せな日も、泣きたい日も。そしてその度に、あの夜の満月の光と記憶が、静かに私の心を抱きしめ、遠く離れた家族の温もりをそっと感じさせてくれるに違いない。月の光は、これからも私の心の中で、静かに揺らめく温かな架け橋としてあり続けるだろう。